

口際テスト規定 クラス：Ⅲ (IP0 クラスⅢ)

1980年より有効

FCIの使役大委員会で1979年1月13日 スラスのバーベル  
で完成され 1980年1月12日 491-1 371で補充発効

A 追跡作業(100点)

追跡の実施継続 = 80点

追跡の対象物 = 20点 (6+7+7)

800mの距離で作業する。その場合3つの直角(90度)のコーナーを設定した所を1時間前につけられた痕跡を追いかける

追跡路設定者は後方からやってきて、スタート棒の右側に位置する。彼は約1分間 地面をひかいたり出発地点を踏むつたりすることなく止まっている。

113113異なった素材でできた3つの物体(これらのうちの1つは金属でできていてその寸法は円柱状の表面の長さが約10cm 円柱状の物体の直径が最低15mm 最大20mmの平坦な物体で幅は2cm~3cm 厚さは5mm~10mmでこれらは良く使われるもの)を 追跡路設定者は少くとも30分前からポケットに入れておかねばならない。そして同一物が追跡路とにおかれる。すなわち1の対象物がコースの中央に、2の物体はコースの中央に、3の物体は追跡路の最後に置かれる。追跡路設定者は最後の物体を置いたあと尚10歩程直進してから追跡路から退場せねばならない。

物体は、木のえは、導標となるマストや他の特徴ある地標に置かれてはならない。目立つ色の物体や風によって簡単に吹き払われる様な物体は使用されてはならない。

全ての物体にはナンバーが打たれ、スタート構のナンバーと物体のナンバーとが一致せねばならない。

ハンドラーは足跡の設定を目撃できる様に監視されねばならない。

足跡設定にはベースとして一步=75cmとして計算される。

追跡テストを受けるに当ってハンドラーはロープでつながれた犬又は追跡装備を施した犬を供って審査員の所で自己申告をする。犬は必ずしも坐る必要はない。

ハンドラーは自分の犬が物体をくわえ子か指示するかを申告せねばならない。

犬が物体をくわえ上げた時、犬は立ったままでも良い、坐っても良い。又はハンドラーの所へもどっても良い。

いつも同じ方法で行なわれる必要はない。

物体の指示も坐っても伏せの姿勢でも立ったままでも行なわれて良い。又いつも同じ方法で行なわれる必要はない。

両方一緒つまりくわえ上げた指示するというのは「正しくない。又くわえ上げた後で落した時も減算である。

走りせ方はハンドラーに任かされている。又犬が長いロープ付きで走りかロープなしで走りかも自由である。

捜索ロープをつけて走りせる場合には約10mの長さが必要である。捜索ロープは追跡させる場合には常に完全に巾締められていなければならない。

ロープを付して追跡の場合には ハンドラーは約10~12mの  
の間隔をおいて犬を追走する。追跡はハンドラーが  
並足で追走できるように ゆっくりと静かに行なわれね  
ばならない。発見された物体は高く持ち上げられた後  
運ばれて 審査員に申告する際 手渡されねばならない。

もし犬が追跡路のカーブで道を外れてしまった場合には  
その犬は もう一度 出発構にもどされて 二度目のトラスプル  
を行える。但し その場合 犬は くれ相応の 減点をうける。  
審査員は くれについての 指示を与えることができる。  
ハンドラーは 審査員に対し くれについての 許可を求めることが  
できる。

犬が 最初のコーナーを越えてしまった場合 最初の 出発位置  
にもどることは もはや許されない。

追跡作業中は 何らかの 食料を 三ほりかきして 犬に与える。  
ことは 許されない。

ハンドラーは 追跡終了後 ロープを付けた犬 又は 追跡装備  
を施した犬を 従って 審査員に 終了申告をする。  
その場合 犬は 必ずしも 坐っている必要はない。

## B 順送 (100点)

一般的規定 — 審査員は、いずれの場合にも作業の完了までの指示を与える。

ハンドラーの犬への呼びかけ(カケ声)は自由である。これは通常の方法で、リゲなく与えられねばならない。その犬の名が命令と共に結ばついて与えられる場合、これはこの呼びかけ(カケ声)とみ込まれる。足の悪いハンドラーが走行を歩行時のスピードで行なわざるをえなくとも、事情柄やむを得ない。

## 1. 足元での自由(ロープなし)追走 (20点)

ハンドラーはロープなしの犬を伴って審査員の前に出る。犬はハンドラーの左足元に坐る。これに申告する。

犬は

1- 各歩行様態に於てハンドラーの左側で自発的かつうれしげにハンドラーに従って歩行せねばならない。

2- ハンドラーのひざの高さに犬の肩が二掛りねばならない。

3- 立ち止るときは、何らの幼きかけなくすなわち何らの命令されることなく、ただちに停止せねばならない。

ハンドラーは

- VA. ロープを左から右下に巻きかけねばならない。
- B. ゆっくりした歩行および通常の歩行では両腕は楽にしておく
- C. 止まる場合には基本姿勢を変えてはならない。

テストを始めるに当ってハンドラーは自分の犬をゆっくりと50歩直進させ、ストップを指示することなくもどいて来なければならぬ。  
その後で作業は次の様に実施されるべきである。

- I. 通常の歩行で
- II. ゆっくりした歩行で
- III. 駢足走行で かつとき駢足走行から直接停止することはない
- IV. 左へ 右へ 方向転回 かに引き返す
- V. ストップ

走行開始 走行方法の変更の際には呼びかけが許される。

ハンドラーが自分の犬を自由走行させるとき、その犬は射撃無反応性のテストを受ける。この場合、20歩程離れた所から2発のピストルが発射される。犬はこの射撃に動揺にはならない。攻撃的反應を示したら減点である。恐怖心におそわれた犬は審査から除外される。

ピストルの口径は 6mm ~ 9mm である。

2. 動作から坐位への移行 (10点)

ハンドラー および犬は直進する。約20歩程進んでから犬は呼びかけ(命令)においてすぐに坐らねばならない。そして犬はそのままおとなしく坐っている事。そしてハンドラーは振り向くことなく犬の位置を更に20歩程歩かす。そして犬の位置で止まり方向を自分の犬の元へ変える。ちあと間をおいてからハンドラーは基本姿勢をとっている自分の犬の元へ歩いて行く。

Sitzen (お坐り) という呼びかけは許される。

3. 接近動作の中止 (15点) 犬を伴って

ハンドラーは基本姿勢から10歩程直進し更に10歩程馬足ですすむ。犬のあとをかける声(命令)を受けて犬はたまたまの場で"伏せ"の姿勢をとらねばならない。この時ハンドラーは自分の歩行を中止してはならない。

ハンドラーは更に振り返ることなく30歩程歩かすを止めて立ち止る。そして犬のそばに近づく。1分程たつてからハンドラーは審査員の指示に応じて再び犬の視野の中に現れる。そしてフィールドのほぼ中央にでてちあと間をおいてから犬を呼びかける。犬はよる二歩いさんで早足でもってきてハンドラーのすぐ前に坐る。更に犬のそばをかける声を受けて犬はすかさずハンドラーの隣にきて坐らねばならない。"伏せ" "こっちへ来い" "足元へ" という命令は許される。

#### 4. 駆足からの停止 (10点)

ハンドラーは基本姿勢から犬を伴って直進する。  
少なくとも10歩進んだ所で犬はかけ声に応じて  
ただちに立ち止まらねばならない。この時ハンドラーは  
歩行方法を変えたり振り返ったりにはならない。

更に30歩程進んだ後、ハンドラーは立ち止まり犬の左へ  
回れ右をして振りかえる。審査員の指示に従って犬  
が呼びよせられる。犬は早足でかけ最短距離で  
ハンドラーの前に来て生らねばならない。

新たにかけ声をかけられて犬はただちにハンドラーの足元  
隣にきて生らねばならない。

"立止" "こっち来い" "足元へ" というかけ声が沖るされる。

#### 5. 高さ1.00m幅1.50mの障害を越えての獲物の捜索 (15点)

えに似た又はそれと類した灌木でおおわれた障害物  
が自由に振動するように取り付けられている。この場合  
回転角は真中よりと設定されねばならない。

(スケッチ参照のこと)

ハンドラーは障害の手前適当な距離をおいて位置する。  
犬はハンドラーの隣に生る。そしてハンドラーは自分で  
進んだ物体を障害物を越えて投げる。

"Hopp-Bring" (跳んで取ってこい) というかけ声を  
きいて犬は自由に障害をよびこえて物体をくわえ  
よび再度障害をよびこえてハンドラーの前へもどってきて  
すぐ前に生らねばならない。

犬はハンドラーが少し向を向いてから物体をとり上げるまで物体をくわえたままでいなければなりません。

犬はひきつづきハンドラーの傍にまで生らねばなりません。

犬が障害物をこえて向う側に着地する前か“おて来い”といふカケ声(命令)が与えられねばなりません。

前脚姿勢をとらせても良いが、ハンドラーは犬がもどくまで長たづきにその姿勢を取らせねばなりません。

Hinweg (いけ) Bringen (もってこい) Auslassen (放せ) Fues (足元へ) — これらのカケ声は使っても良い。

## 6. よじ登っての獲物の捜索又は幅跳び (15点)

ハンドラーは犬がどの部内でテストを受けかかを申告する

### a) よじ登って獲物を捜索する

傾斜板は幅1.5mの2枚の板がつけられた登はん板からできている。その下部は、地とで2枚の板が相互に一定の距離をおいて立っている。垂直の高さは1.80メートルである。板の厚さは28~48mmの3本の登はん段がとりつけられている。

ハンドラーは適当な距離をおいて登はん板の前か立つ。犬はハンドラーの傍に自由に坐る。ハンドラーは自分で選択した物体を登はん板越しに投げける。

“跳んで持ってこい”とカケ声をかけると犬は登はん板をよじ登って越え、すぐの物体をくわえどが再び登はん板を跳び越えてもどってきてハンドラーの前か

生らねばならない。犬はハンドラーがとおと間をおいてから  
物体を取り上げるときまでそれをくわえつづけていなければ  
ならない。その後引きつづき犬はすばやくハンドラーの傍に  
きて生らねばならない。

“持ってこい”というかけ声は犬が登はん板の向側へ飛び  
越えて着地する前に与えられねばならない。

開脚姿勢をとらせても良いがハンドラーは犬がもとむたら  
ただちにその姿勢をとらせねばならない。

“行け” “持ってこい” “放せ” “足元へ” というかけ声は許される。

### ウ) 幅跳び

幅跳び用の器具は 2x2本の30cmの高さの足をもちた横  
150cm 縦 200cmの木枠である。この木枠の壁には  
20~25cm 間隔で 白いバンブーが張られている。

ハンドラーは 200cmの長さの障害物から適当な距離を  
おいて位置する。犬はハンドラーの傍に自由に生る。  
適切なかけ声をきいて 犬は自由に障害器具に触れる  
ことなく飛び越えねばならない。  
犬は障害物の向う側で立ち止ってハンドラーが迎えに  
いくまで待っている。  
“跳べ” というかけ声は姿勢をかえずに発せられねば  
ない。

“跳べ” “立て” “足元へ坐れ” というカケ声は許される。

自由跳躍 上記登りの獲物の捜索 および橋跳びの規則

犬が一度 跳べというカケ声を聴いて 自分のポジションを離れたら 犬はもはや足元へ呼ぶもどきにはならない。又作業をやり直してはいけぬ。

しかし 減点を覚悟すれば 付加的命令を与えて 跳躍させてもよい。

7. 先に犬を行かせて伏せを命ずる (15点)

審査員の指示に応じてハンドラーは 自分の犬を伴って 2~3歩 指示された方向へ 真直ぐ進む。 “先へ” というカケ声と共に ちよと手ご合図を受けて 犬は 早足で 少なくとも 4歩程 指示された方向へ 向かぬばならない。若干 左右へ ずれたことは許される。

ハンドラーは 命令を授けたら 犬と共に 立止る。更に 命令を受けて 犬は 伏せの姿勢をとる。 =9場合 犬が 指示されて 進んできた方向 に向けて 伏せるか 向きを変えて ハンドラーの方を 向いて 伏せるかは どちらでもよい。 審査員の指示に従って ハンドラーは 犬の所へ 行き 犬の右側に 位置する。更に 審査員の指示により 犬は “お坐り” のカケ声を受ける。 その後 ハンドラーは ロー70歩の犬と共に 審査員の所へ 行き 終了を 申告する。

C. 防衛テスト (100点)

1. 助手を捜索する (5点)

長さ約100m 幅80mの通常の設備を施した防衛テスト用ゲレンデに6つの隠れ場所をつくる。

捜索開始前にハンドラーはロープの犬を連れて審査員の所へいき申告する。

それから審査員の指示を受け犬と共にフィールドの中央へ行きその隠れ場所の前に位置を占める。

右手又は左手で合図をするか呼びかけ(命令)を与之(これは繰り返して行ってもよい)犬は早足でハンドラーの足元から走り出しゲレンデを3回左へ3回右へ

(又は逆方向に)捜索する。ハンドラーは中央線とを動く。人工的ゲレンデでは最大3m自然のゲレンデでは5mまで左右へズレが許容される。

試技中犬がハンドラーの足元へもどってくるのは自然のゲレンデに於てのみ許容される。

完全防護服(ビッチズボン)に身をつんば助手はムチで武装して最後の隠れ場所に身をひそめる。犬が最後の隠れ場所の方向へ向って走り出したらハンドラーは立止る。犬が最後の隠れ場所の位置までやってきたら もはや命令は許されない。

2. 立ち止まり吠えて助手の位置を知らせる(10点)

犬が助手を発見したら立ち止まって獲物の位置を(助手の位置を)知らせねばならない。助手は冷静にふるまわねばならない。

犬はしゃがみかたり、かきついてたりにはいけない。

約10秒後、ハンドラーは審査員の指示に従って通常の歩行ですすみ助手から約5歩の位置に立ちこまる。犬はハンドラーが入場するまで助手の所にとどまっていなければならない。

他所へ移動してはいけない。

審査員が新たな指示によりハンドラーは自分の犬を足元によびよせる。犬はただちにやってきて足元に生らねばならない。

そして「ふせ」の命令を受けてふせねばならない。

ハンドラーは助手に合図を送り腕を上げて隠れ場所からでてきてくれる様にたのむ。そして背後から助手を調べて武器を探る。犬は自分の位置からの成行きを鋭く観察し、いぼり強く吠える事か待っていなければならない。

そしてハンドラーは隠れ家の中へ投げ入れられた物体を探る。

評価: 立ち止まり 1点 吠えて位置を知らせる 6点

### 3. 逃走と防衛 (25点)

ハンドラーが隠れ場所に居る場合、助手は審査員の指示を受けて早足で逃走を企てる。ハンドラーの命令がなくても犬は助手にしっかりと咬みついて逃走を阻止せねばならない。そして助手をその場に釘づけにする。審査員の指示に応じて助手は目撃手段を講ずる。すなわち彼は静かに立ち止まっている。犬はただちに咬んだ所を放し、助手を監視せねばならない。「放せ」という命令は許される。審査員の新たな指示に従って助手は犬に襲おうと企てる。犬はハンドラーの命令がなくてもすぐさま反攻にうつり咬みつくことにより助手の抵抗をうちくだく。

審査員の指示により抵抗をやめ、静止する。

犬はただちに咬んだ所を放し、助手の監視にうつる。  
「放せ」というかけ声は許される。

審査員の指示に応じてハンドラーは5歩助手に近づき犬を足元に呼びよせる。

評価： 逃走 12点 防衛 13点

### 4. 背後からの移送 (5点)

引き続き助手を5歩程審査員の方向へ後送する。

審査員の指示に従ってハンドラーは助手に前進する  
ように依頼する。ハンドラーは助手と約5歩の間隔を  
おいて足元に犬を促して助手のあとを導く。

「足元へ」というかけ声は許される。

犬はハンドラーの傍にとどまらねばならない。犬は突進したり、とびかかったり、かみついたりしてはいけない。

### 5. 襲撃と移送 (15点)

背後からの移送に引き続いて、審査員の指示に従って助手およびハンドラーは犬と共に立ち止る。

審査員の新たな指示に従って助手は振り返って突然ハンドラーを襲撃しようとする。犬はハンドラーの命令がなくてもすぐさま咬みつくことにおいてこの襲撃を防がねばならない。

審査員の指示に従って助手はおとほくする。犬はただちに助手を解放し、監視体制に入らねばならない。

「放せ」というかけ声は許される。審査員の指示に従ってハンドラーは犬を自分の足元に呼び寄せる。

この襲撃にひきつづき助手の側で移送が審査員のいる所まで約20mの距離でおこなわれる。ハンドラーは犬を伴って助手の右側を進む。犬は助手とハンドラーの間に位置するようになる。

犬は助手の移送中とびかかったり、かみついたりしてはいけない。進行する際「足元へ」というかけ声は許される。

### 6. 臭気(臭性)テストと移送 (40点)

ハンドラーが助手を先におこなった側で移送において審査員の所へ運んだあと、ハンドラーは自由に歩いて犬を伴って約60歩程離れねばならない。

ハンドラーおまが犬は助手の矛へ向いて立ち止まる。犬は首輪をしっかりとつかまれる。

審査員の指示に従って助手は反対方向に足早に逃げる。審査員の特別な指示が無くともハンドラーは犬を助手の逃走へさし向ける。ハンドラー自身は止まっている。逃走の為のカケ声は許される。

犬が道程の半分程行ったら助手は振り返って犬に向かって走り、はげしくムチをふって威嚇の動作を行い犬を遠ざけておくようにさせる。

助手の威嚇動作は助手の胸の高さより深い所で行われるべきではない。

犬は威嚇の影響されることなく、ただちに力強く咬みついていかねばならない。

犬が咬みついてした後、ムチが二度犬の敏感ではない箇所を当てられねばならない。このとき犬は咬みつきをやめてはならない。

審査員の指示に従って助手は静止する。犬はただちに咬みつきをやめ、助手を監視する。「放置」というカケ声は許される。

審査員の指示に従って助手は新たな攻撃を犬に向けて企てる。その際助手は自分が所有しているムチを防御のために用いる。意図的に犬にムチを当てたことは許されない。

犬は、この攻撃をすく様咬みつくニとにおいて阻止する。

このときハンドラーは何も命令や働きかけはしない。

"審査員"の指示に従って、助手は静止する。犬はただちに咬むニとをやめ、助手の監視体制へ入りねばならない。  
"放せ"というかけ声は許される。

審査員"の指示に従ってハンドラーは助手の所へ行き武装解除し、犬を自分の足元に呼びよせる。

何度も"放せ"というかけ声を繰り返しても犬が咬むのをやめたい時は、ハンドラーは審査員"の指示に従って犬の所へ早速で駆けつける。

引き続き助手を審査員"の所で約20m側へ移転する事がおこなわれる。動き始めるとき"足元へ"というかけ声(命令)は許される。

犬を伴ったハンドラーは助手の右側を歩かねばならない。

この時と犬は助手とハンドラー"の向にくる事になる。

犬は助手の移転中、とがががたり咬みつきたりしてはいけない。

側へ移転のあとハンドラーは犬を審査員"に渡し、犬にロープをつけ終了申告をする。

助手が攻撃によって地面に倒れたら、試技はただちに中止されねばならない。もし転倒が試技開始後すくに起った場合には、試技は再度繰り返される。

評価 勇気15点 攻撃13点 移転2点

## 評価

A. 追跡作業	追跡の実施継続	80点
	追跡の対象	20点
		計100点

B. 服従	足元での自由追走	20点
	動作から坐位への移行	10点
	接近動作の中止	15点
	馬足からの停止	10点
	障害越えの搜索	15点
	おし寄り搜索又は幅跳び	15点
	先走りや伏せ	15点
	計100点	

C. 防衛	助手の搜索	5点
	立ち寄り伏えて位置を知らせる	10点
	逃亡と防衛	25点
	背後移送	5点
	襲撃と移送	15点
	勇気テストと移送	40点
	計100点	

総合評価	VA (優)	300 ~ 270点	= 90% = ㄨ
	SG (良)	269 ~ 240点	= 80% = ㄨ
	G (可)	239 ~ 210点	= 70% = ㄨ

AK区(訓練表彰)を獲得するには A および B の項目  
 で少なくとも 70% = ㄨ 及び C の項目で 80% = ㄨ の  
 得点に達せねばならない。